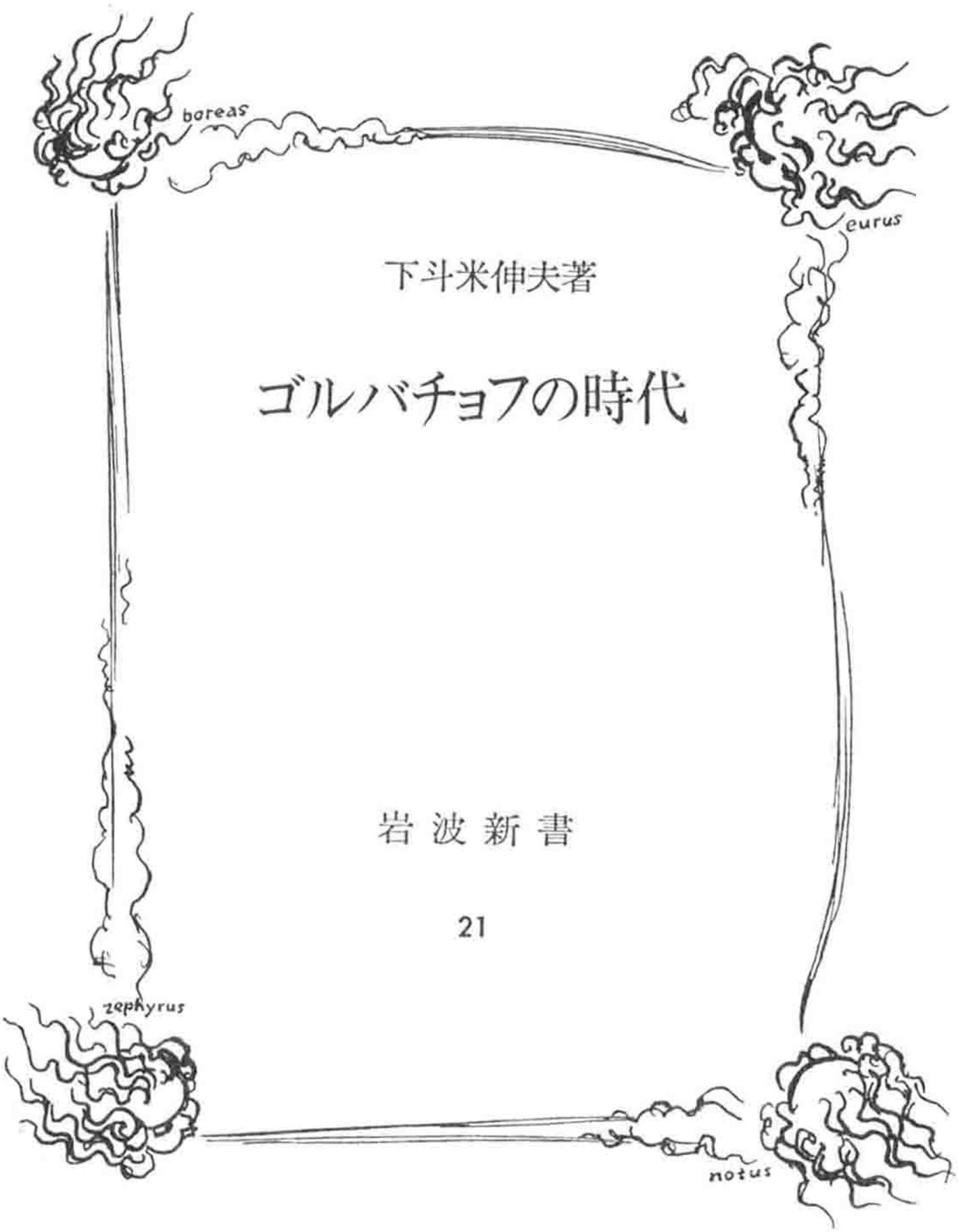
下斗米伸夫著

ゴルバチョフの時代

岩波新書

21



下斗米伸夫著

ゴルバチョフの時代

岩波新書

21

下斗米伸夫

1948年北海道に生まれる
1971年東京大学法学部卒業
専攻—ソ連政治史，現代ソ連政治
現在—法政大学教授
著書—「ソ連現代政治」
「ソビエト政治と労働組合」
(以上，東京大学出版会)
訳書—R. メドベージェフ，A. メドベージェフ「フルシチョフ権力の時代」(御茶の水書房)ほか

ゴルバチョフの時代　　岩波新書(新赤版) 21

1988年5月20日　第1刷発行©

定価480円

著　者　下斗米伸夫

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京6-26240

印刷・三陽社　製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　Printed in Japan
ISBN4-00-430021-5

はじめに

――やや個人的なモスクワ体験――

一九八七年六月はじめ、私は目の前でくりひろげられる市民たちの討論に、ほとんど驚愕しながらメモをはしらせた。一九七五年に初めてこの地を訪れて今度で六度目のモスクワ訪問となるが、このような光景には、これまで一度もお目にかからなかったからである。

モスクワのある学術機関の会議室では、さきほどから、モスクワの右派組織である「パーミャチ(記憶)」の民族的偏見に抗議してデモをするべきか否かについての討論をくり返している。ある年配の人は、他にすべきことがいくらでもあるではないか、と主張する。ある研究所を首になったという中年の人は、「それは挑発だ」と激昂する。それに対して、デモを提案したまだ幼さがのこる若者はやり返す。議長が、シャープな感覚で介入して、八月にできるはずのモスクワ・ソビエトのデモの条例ができるまで待つべきことを提案した。採決はとられなかったが、多くの人が賛成していくのがわかる。

つづいて、つぎの議題にうつり、組織の行動目標を具体化しようと議長が提案、八つほどの課題が提起される。いずれも従来の「ソ連論」にはない、少なくとも日本のソ連学者には初耳のことばかりである。生産企業の民主化、ペレストロイカ以後の組織(政治体制の設計のことか)から、自主的連合組織の法的地位、経済改革、抑圧の犠牲者の記念塔といった問題がだされる。印刷物の作成や、連絡網と責任者、講演会の準備と講演者、他の政治討論クラブとの連携、といった問題をつぎつぎにこなしていく。議長の采配は、日本の市民運動よりは手際よい。七時すぎに予定の三時間の会議が多少遅れて終わったとき、いったい自分が今どこにいるのかとの錯覚すらおぼえた。

日本でも、このような「非公式集団」がソ連の政治の舞台に出現しはじめていることは、文献によっていちおう知ってはいたが、しかし外国人である筆者のまえでこのような会議がおこなわれることは想像もしなかった。このとき筆者は、ソ連の巨大な転換の中にいることを実感した、と書けばあまりにも陳腐だが、やや客観的記述のスタイルをとった本書を書く刺激となった個人的体験はこのようなものである。

いまこのような変化は、ソ連の人びとにさまざまな形で生じていよう。かつての裁判と処刑後五〇年をへて復権されようとしているブハーリンの家族、スターリン時代の名もない犠牲者

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

たち、その他かず限りない個人的体験での変化をともないつつ、ソ連は動きはじめている。どこにいくのかはいまだ判然とはしないが、それでもソ連は独自の論理にしたがって変化していこうとしている。本書は、ゴルバチョフのもとでのペレストロイカが、その本格的実施の段階をむかえるまでの時期、つまり一九八八年はじめまでを対象としてあつかった。この意味ではペレストロイカ前史、より正確にいうと「半ペレストロイカ」(クラシビリ)の前史についてのひとつの備忘録である。

本書が、われわれの現代理解に欠かせない、そして少なからぬ興味の対象であるソ連についての認識の進化への一助となれば幸いである。この本をまとめるに際し、岩波書店の宮部信明氏と筧直氏にはひとかたならぬお世話になった。なお、同じ時期に並行して書かれた『ソ連現代政治』(東京大学出版会、一九八七年)は、いわばこの本の理論編と考えていただきたい。

一九八八年四月　アフガニスタン和平協定調印の報道をききながら

下斗米伸夫

極　海
マガダン
オホーツク海
ノリリスク
レナ川
ヤクーツク
エニセイ川
アムール川
ハバロフスク
クラスノヤルスク
ノボシビルスク
バイカル湖
イルクーツク
チタ
ウラジオストック
ソビエト社会主義共和国連邦
0
500
1000 km

リトアニア共和国
ラトビア共和国
エストニア共和国
北
ムルマンスク
白ロシア共和国
バルト海
ウクライナ
共和国
リガ
レニングラード
アルハンゲリスク
ドニエプル川
ミンスク
リボフ
ロシア共和国
モルダビア
共和国
キエフ
モスクワ
ゴーリキー
オデッサ
ハリコフ
ボルガ川
カザン
スベルドロフスク
オビ川
ドニエプロペトロフスク
クイビシェフ
黒海
ロストフ
クラスノダール
ボルゴグラード
(スターリングラード)
オムスク
アストラハン
カザフ共和国
グルジア共和国
トビリシ
イルチシ川
エレバン
アラル海
カラガンダ
カスピ海
バクー
シルダリア川
アルメニア共和国
アルマアタ
アシハバード
タシケント
アゼルバイジャン共和国
フルンゼ
サマルカンド
キルギス
共和国
トルクメン共和国
ドゥシャンベ
タジク共和国
ウズベク共和国

目

次

はじめに
—やや個人的なモスクワ体験—
第一章　ブレジネフからゴルバチョフへ……1
1　ブレジネフ体制の終焉……2
2　ブレジネフ時代——安定の代償……16
3　「七度測り、一度で裁て」——改革論の台頭……22
第二章　ゴルバチョフの時代……35
1　ゴルバチョフ体制の確立……36
2　「改善」から「根本的改革」へ……51
3　シベリア河川転流計画の中止……65
第三章　ペレストロイカは第二の革命……81
1　改革とイデオロギー……82

2　歴史の見直し……96
3　経済改革の構想……111
第四章　政治改革＝新しいソ連？……121
1　グラスノスチの行方……122
2　「影」とのたたかい……130
3　市民社会の胎動……137
第五章　「新しい思考」の国際観……149
1　「新冷戦」から「新しい思考」へ……150
2　変化するソ連外交……162
3　日本とソ連……172
終章　革命七〇年からの出発……179

写真提供＝ノーボスチ通信社・読売新聞社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　ブレジネフからゴルバチョフへ

ブレジネフ(上左)　アンドロポフ(上右)
チェルネンコ(下左)　ゴルバチョフ(下右)

1　ブレジネフ体制の終焉

ソ連史の展開とブレジネフ

一九八七年一一月、ソ連は革命七〇周年を迎えた。一九一七年の一一月(旧露暦で一〇月)に起きたロシア革命、ボリシェビキとエスエル左派による革命的権力の樹立からかぞえてである。一一月二日、ゴルバチョフ書記長は記念演説をおこなって、この七〇年の成果とともにその過誤も語った。そこでは、革命後の戦時共産主義の時期(一九一八―二一年)、たかい評価をえたネップ(新経済政策)の時期(一九二一―二八年)、集団化と工業化および「官僚主義的行政的管理」のスターリン時代(一九二九―五三年)、そして非スターリン化の時代とブレジネフの停滞の時代(一九五三―八二年)が、おおむねこの位置づけで評価された。

ここでは、ブレジネフという、必ずしも卓越したわけではないが、しかし長期にわたって安定した権力を保持しつづけた指導者の道とからませながら、ソ連史を簡単にふり返ってみよう。

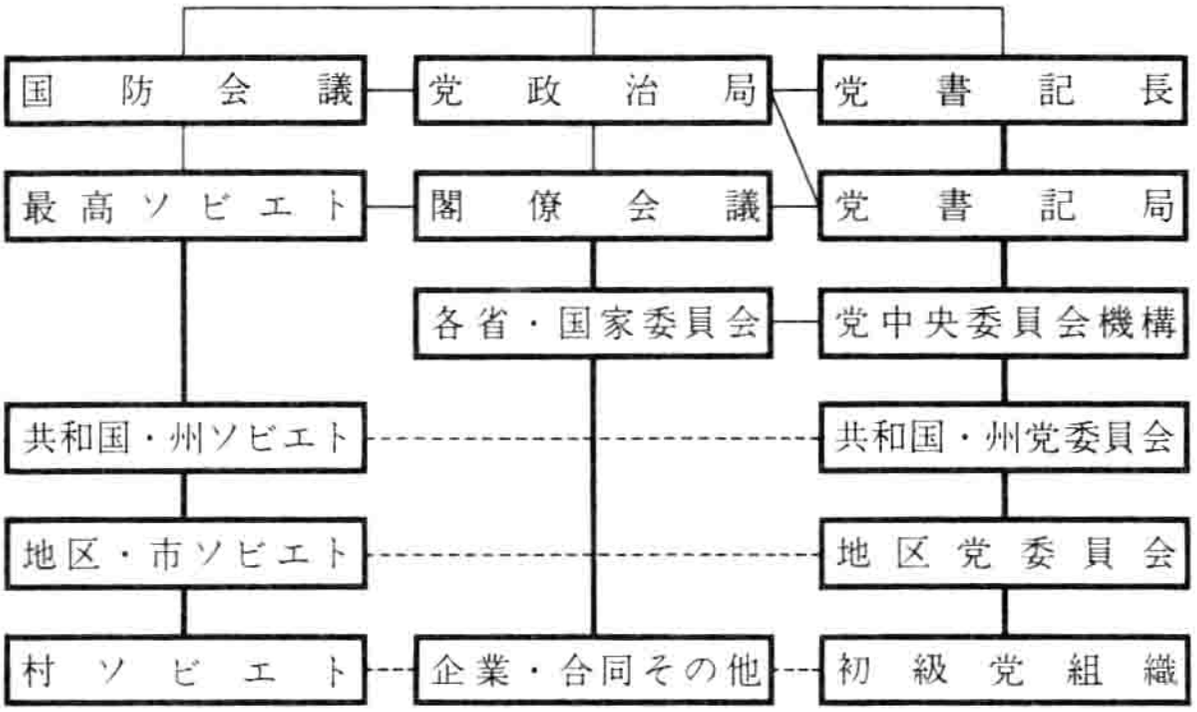
レオニード・イリイチ・ブレジネフがウクライナのカメンスコエ(現在のドニエプロジェルジン

スク)でロシア人冶金工の子供として生まれた一九〇六年は、日露戦争の敗北をきっかけにして起こった第一次ロシア革命の翌年であった。その一一年後、ロシア革命が第一次世界大戦下のロシアで起きる。ブレジネフが労働者として一五歳で働きはじめるのは一九二一年であるが、この時は戦時共産主義から「食糧税」導入によるネップに移行しはじめたばかりであり、まだ農民反乱や南部での飢饉の余波があった頃である。ネップにおける経済復興がはかられる一九二三年、ブレジネフはコムソモール(共産主義青年同盟)という党の青年組織にはいるが、この翌年レーニンが亡くなっている。土地改良の学校にいったのち、ウラル地方などで耕地企画のための測地技手に転身。一九二八年からの穀物調達危機と農業集団化の嵐のなかで、ブレジネフはウラルの地区農業部長や地区執行委員会副議長といった仕事をおこなった。ウラル・シベリア方式という集団化方式の発祥の地で、かれはスターリンによる「上からの革命」を忠実に実行したのであろう。

しかし、スターリンの工業化政策により膨大な「赤い」技術者養成が課題となったとき、のちにキリレンコ、コスイギン、ウスチノフら、ブレジネフの指導集団を構成することとなる多くの同世代の若者とともに工業専門学校にはいった。ブレジネフは故郷のウクライナのドニエプロジェルジンスク冶金専門学校で一九三一年から学びはじめている。入党もこの時であった。

一九三五年には学校を卒業、軍をへて技術者となる。しかし、一九三七年の粛清の過程で、「古参ボリシェビキ」の世代が一掃されたとき、ブレジネフはウクライナの工業都市のソビエト副議長から、やがてドニエプロペトロフスク州の軍事工業関連の党活動へとうつる。この時ウクライナの党を監督したのは、同じウクライナ出身で、モスクワ市政を担当してきたフルシチョフであった。第二次世界大戦中、ブレジネフは軍の政治将校であった。戦後はウクライナの州第一書記、やがてモルダビア共和国第一書記となり、民族問題で重要なこの地の指導をする。チェルネンコは当時の部下であった。

スターリン死後の一九五四年、フルシチョフが農政改革を企画し、カザフの処女地開拓を始めたとき、ブレジネフはカザフ共和国第二書記としてここに赴任し、やがて第一書記となってこれを成功させ、フルシチョフの権力の確立と非スターリン化をささえた。さらに一九五六～六〇年には党書記として軍事産業を担当し、ロケットやガガーリンで有名な人工衛星などの開発も手がけている。一九六〇年から六四年にかけて最高ソビエト幹部会議長であり、一九六三年書記にも復帰、一九六四年一〇月のフルシチョフの失政による権力交替にさいして、党第一書記(一九六六年書記長と改称)となり、コスイギン閣僚会議議長と権力を分掌することとなる。この後一九七七年には最高ソビエト幹部会議長ポドゴルヌイを追放し、ふたたびこの地位にも



ソ連の政治機構

つく。

この経歴がしめすように、ブレジネフは農業・工業・軍事と一様に役をこなした指導者といえる。しかし、安定した、制度的利害を第一とした保守的統治がつづいた結果、やがて改革の欠如と生産性の低下により、ソ連は停滞の時代へとはいる。一九八〇年前後には、アフガニスタンへの軍事介入、ポーランドにおける「連帯」の運動、アメリカでの保守政権の台頭など内憂・外患の時期を迎えた。

ブレジネフ時代最後の党大会

一九八一年三月、ブレジネフ時代最後の第二六回党大会が開かれた。実際にはソ連共産党というのは、ソ連の唯一の政党、統治の党であるだけでなく、国家機構の人事をもふくめ「社会を指導し、方向づける」(憲法第六条)といった、きわめて特殊な役割を果たしている。

1988年における政治局員とその職務

1981年3月		1988年2月	
ブレジネフ	(～82.11)	ゴルバチョフ	(80.10)*
スースロフ	(～82. 1)	リガチョフ	(85. 4)
キリレンコ	(～82.11)	ザイコフ	(86. 3)
チェルネンコ	(～85. 3)	スリュニコフ	(87. 6)
ゴルバチョフ		ニコノフ	(87. 6)
		ヤコブレフ	(87. 6)
ブレジネフ(兼)		グロムイコ	(73. 4)
チーホノフ	(～85.10)	ルイシコフ	(85. 4)
		ボロトニコフ	(83. 4)
グロムイコ		シェワルナッゼ	(85. 7)
アンドロポフ	(～84. 2)	チェブリコフ	(85. 4)
ウスチノフ	(～84.12)		
シチェルビツキー		シチェルビツキー	(71. 4)
グリシン	(～86. 2)	ザイコフ(兼)	
ロマノフ	(～85. 7)		
クナーエフ	(～87. 1)		
ペリシェ	(～83. 5)	ソロメンツェフ	(83.12)

の数字は，政治局員になった年月をしめす.

この意味で、ソ連社会主義体制のもとでの党は、西欧民主主義国の政党とも、第三世界の権威主義体制の政党とも機能が異なる。これを政治学者は「党・国家」体制とよぶこともある。党大会は党のなかでもっとも重要な最高決定機関である。その会議の最終日には、党中央委員が約三〇〇名程度えらばれ、その最初の総会で新しい政治局員をふくめた指導部が選出される。

ソ連の政治体制のなかでも党政治局というのは、ややわかりにくい。これは党規約では、党中央委員会総会でえらばれ、中央委員会の総会と

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com